

英語の文法性・容認度・適応性

大 槻 博

英語の言語現象のとらえ方は、20世紀に入る以前は good English 又は bad English といったとらえ方をしていたのであって、このことは英文法をギリシャ語、ラテン語から類推してとらえてきたのである。文法は守らねばならない規則であるというとらえ方をしていた。そして、文法について次のような誤まった概念があった。

1. 文法は不変である。
2. 文法によって、ことばは good 又は bad, correct 又は incorrect と区別される。
3. 文法は書かれることばにのみみられるのであって、話されることばには、文法はなにか、一部しかない。
4. 一部の人々しか文法を知らない。

このような誤まった言語観は、しだいに修正が加えられていったのであって、たとえば1776年に George Campell (*Philosophy of Rhetoric*) は「言語の正しさは、national (地域方言的でない)、reputable (社会的に尊敬を受ける)、present (現代の) の3点から規定される、よいならわし (good custom) の中にある。」^④ といっている。また19世紀の Fizedward Hall (*Modern English* (1873)) は、「良い語法とは、最良の作家や話し手たちの話法である。」^⑤ と言い、文法を守るべき規範であるという考えからぬけ出ている。

20世紀に入ると、good English, bad English をただ単に correct English, incorrect English という意味で使うのではなくなってきた。good English の good の意味について、次のような2つの意味があると考えられるようになった。(1)文法にかない、一般に認められた語法に一致している。(2)そのことばが、使われる目的に効果的であり、適切である。(2)の意味での good English は、話されたことばが、その話された場に適しているかどうかについて、そのことばの適否を判断するのに対して、(1)の意味での good English は、ことばそのものを、文法にてらしての判断なのである。たとえば、

Ain't (=I have not) a thing in my pocket.

You *ain't* gonna put *nothing* over on me. (=You are not going to deceive me.)

(*Of Old Man and Mice*)

このような文は、これらが話される状況で、たとえば Steinbeck の *Of Old Man and Mice* にある無教養な季節労働者の会話でのような場で、最も効果的であるので、(2)の意味においてはまさに good English であるけれども、しかしながら多くの人達は、学校では習わなかったとか、教養ある人達はこのような *ain't* や2重否定を使わないので、bad English だと思い、このように話す人達を無教養だと思う。とにかく、good English の持つ意味は、従来からあった(1)の意味での correct, incorret に加えて、(2)の意味での proper, improper または appropriare, inappropriatate という概念が加わってきた。このように、言語現象をありのままとらえるようになり、たとえば、Pooley は「good English とは、話し手の目的に適したもの (appropriate) であり、あるがままの言語に照らして真実 (true)

であり、話し手にとっても、聞き手にとっても快よい (comfortable) なものである。それは習慣の産物であって、規則によってしぼられないが、全ての規則から自由なのではない。』^③ と言っている。

(1)のもつ correct, incorrect, (2)の意味での proper, improper もしくは appropriate, inappropriate に、acceptable, unacceptable の概念を加える必要がある。correct, incorrect は定められた文法、もしくは認められている語法に適しているか、どうかということであり、文法性に結びつく概念であり、appropriate, inappropriate は、話されることばが、その状況に適するように話されているか、換言すれば、usage level に適するように話されているかであり、そして acceptable, unacceptable は、話されることばが理解されるかどうかということである。これら correctness, appropriateness, acceptability は、明白に別個の概念である。かりにある社会的状況のもとに、すなわち、言語について意識をもっていない人達の間で「Aさんの関係代名詞の使い方は correct である。」と話され、correct の意味が appropriate や acceptable と同義的に使われたとしても、言語学的にはこれらは完全に区別される必要がある。このように good English の good のもつ意味は、correct, appropriate, acceptable の3つの要素をもっている。そして correctness は grammaticalness の問題であり、appropriateness は usage level の問題であり、acceptability は理解度の問題である。

この acceptability という概念をもち出したのは Chomsky であって、彼は文法から逸脱した、ungrammatical な文の成生過程を考える際に、acceptability という概念を取り入れたのである。彼の言う acceptability には尺度があって「その高い文というのは発話される見込みが大きく、より理解されやすく、ぎこちなさの少なく、またなんらかの意味でより自然な文であり、unacceptable な文というのは実際の談話において人々がこれを避けようとするであろうし、もしも容認可能性の高い交替形があるなら、いつでもおきかえられようとする。』^④ もちろん、この acceptability という概念は、先にのべたように、correct や incorrect な文を判定する grammaticalness という概念と混同されるべきではない。ある文が文法にかなっているかどうかは、すなわち、grammatical かどうかは言語能力の問題であり、その文が理解されるかどうかは、すなわち、acceptable かどうかは、言語運用の問題である。これら grammaticalness と acceptability とは、文法的な文であるかないか、容認できるかできないかといった2者択一的なものではなく、程度の差があるということである。そして完全に文法にかなっていても、容認度の低い文もあれば、文法からかなり逸脱した文であっても、容認度の高い文があるといったふうに両方の尺度が一致しないことがある。ただ grammaticalness は acceptability を決定する一つの要因となって、grammaticalness が高ければ acceptability も高く、前者が低ければ後者も低いというように、一般的には比例的な関係にある。grammaticalness と acceptability との関係は、次のような図に画ける。

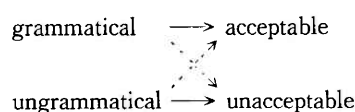


図-1

grammar が acceptability を決定する1つの要因であり、おおよそ比例関係にあるから、線で一般性を、点線で特殊性を示している。

grammaticalness と acceptability との関係について、点線で示した特殊な面、すなわち grammatical ではあるが、unacceptable な例、また ungrammatical にもかかわらず acceptable な例を挙げてみる。

1. grammatical ではあるが unacceptable な文,
The boy who wanted to visit his aunt who lives only with her dog named Fido which is lame because of a car accident on account of which the driver was prosecuted for having a vehicle which had no roadworthiness certificate although he was acquitted was talking with his friends.
2. ungrammatical ではあるが acceptability の高い文,
I wish I was wonderful.
The real reason he failed was because he tried to do to much.

文法によって、おおよそ acceptability の程度が判断されるが、文法による acceptability の段階を低いものから高いものへと次のように考えられる。

1. 文法にはかなっているが、文章ではない。
Ball paints boys.
2. 母国語話者には、すぐにも英語でないと言われる。
This is empty box large.
3. 2より文法的ではあるが、母国語話者が話しているとは思えない文。
I am come here since four years.
4. 母国語話者が話しているような文。
She don't need no help.
Her and him was there alone.
5. 4よりも acceptability の高い文。
She is different than me.
Who did you give it to ?
6. 文法を逸脱してはいないが、acceptability については疑問のある文。
For you to have walked out would not have surprised me,

今まで、文法にかなっているかどうかという概念である grammaticalness, 理解できるかどうかという acceptability との関係について述べてきたのであるが、先に述べた、ことばが話される場に適しているかどうかを問う appropriateness を、これら両者に加えて、3者の関係をみようとする。すなわち grammaticalness, acceptability に usage level の概念を加えるのである^⑥。usage level を考慮に入れると、acceptability, すなわち理解されるかどうかは、広義に使用され、言語学的に理解されるのか、また社会的に理解されるのかという両者に、linguistic acceptability と social acceptability に区別される。注意しておくべきことは、言語に関して acceptability という概念をもち出す時は、今まで使ってきたように、必ず linguistic acceptability を意味しなければならないが、ここでは一応、一般的にもっと広い意味での acceptability ということばを使うものとする。換言すれば、acceptability には広義と狭義とをもち、広義での acceptability は、linguistic acceptability と social acceptability を含み、狭義での acceptability は Chomsky が初めて使った言語学上の linguistic acceptability を示すのである。以下この論文では広い意味で使うものとする。linguistic acceptability についていえば、先ほどもみたように、

acceptability を決定する 要因の一つは文法であるから、文法性が高ければ、linguistic acceptability は高く、文法性が低ければ、それは低くなる。social acceptability についていえば、acceptability を決定する要因は、社会的環境、習慣に起因するのであって、たとえば、tolo という語がある他方にのみその acceptability をもち、すなわち、この語が方言でしかなく、usage level で nonstandard の範疇にしかないのは、この語の social acceptability は低いのである。standard なことばは、その social acceptability は高く、nonstandard なことばは、その social acceptability は低い。このように acceptability は、linguistic acceptability と social acceptability に区別され、前者は文法に連なり、後者は usage level に連なり、その高低は決定される。いいかえれば、人のことばに対する理解は、その人のもっている文法的知識とその人のいる環境などによるのである。

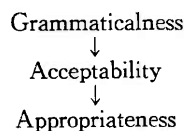
grammaticalness, acceptability, appropriateness の関係は次のように画かれる。

Grammaticalness	Acceptability		Appropriateness
	Linguistic	Social	
Grammatical	High		Standard {Literary General Colloquial
Ungrammatical	Low		Nonstandard {Slang, Dialect Archaic

図一 2

一般に、grammatical な文は、acceptability は高く、standard な用法である。また、ungrammatical な文は、acceptability は低く、nonstandard な用法ではあるが、Who are you looking for? と普通聞かれるように、ungrammatical ではあるが、acceptability は高く、standard であるとされている文も多い。

結局、grammaticalness, acceptability, appropriateness の3者の関係をみると、grammar によって acceptability が決定され、この acceptability の高低によって、どの usage level の範疇に入るか、appropriateness が決定される。



図一 3

図のような関係は、たとえば、

You may ask *whomsoever* you please.

If was *good and* cold when I came in.

Ain't no way possible for you not to believe in God. (*Blues for Mister Charlie*)

は、grammar により acceptability が決定され、それがどの usage level に属するかの appropriateness が決定される。また語彙なども、たとえば、acceptability の低い、non-standard な語は、その語の acceptability の社会的、地理的範疇によって、それが slang

か dialect かが決定される。

〔注〕

- ① 大塚高信編 改訂版「英語慣用法辞典」三省堂。Acceptability の項。
- ② *ibid.*
- ③ *ibid.*
- ④ 安井稔訳, チョムスキー著「文法理論の諸相」研究社, 1970. p. 12
- ⑤ Usage level の分類については Perspective 第2号を参照。